



Vol.43



ゆうことみゆきのふくふくトーク

ソノコ de ソノコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソノコ(=お便り)形式で
語り合います。

イラスト/安田千夏

ヤム(クリ)



クリって、なんだか縄文の香りがする……。なんとって有名なのは、

青森県の三内丸山遺跡。約五千五百〜四千年前の遺跡だけど、クリノキの栽培をしていたことがDNA分析からわかって話題になったよね。甘くて大きい実のなる木ばかりを村の周りに植えていたんだから、たしかに栽培と言えます。建築材としても、太さ一メートルの巨木が使われていたらしいね。巨木と言えば、私の故郷、石川県にある真脇遺跡は約六千〜二千年前の遺跡で、約一メートルの太い柱が十本、直径七、四の環状に立てられていたことで知られます。それもちやっぱクリノキ。だから、クリって縄文文化のシンボルのようなイメージなの。



アイヌの人たちは、この島で暮らしていた縄文人の直系の子孫と言われているから、アイヌの食文化でもクリは特別の位置を占めたんでしょうね。知里真志保博士の『分類アイヌ語辞典植物編』によれば、「カムイ・ラタシケブ(神様の・植物性食糧)」と考えられていたとのこと。

ところで、クリの实のことをアイヌ語ではヤムと言い、渡島地方には、山越内(ヤムクシナイ)をはじめヤムの付く地名がいくつもみられます。でも、道北や道東の方にはまったくないの。それもそのはず、現在、クリの自然林の北限は小樽の手宮公園。そして、東限は日高山脈の幌尻岳(現在は十勝地方にまで進出したそうですが)。



クリの由来譚については、『ポロシルンカムイになった少年』というタイトルでアイヌ民族博物館から刊行されている絵本がありますよ。

この絵本の元となったウエベケレ(昔話)は、平取の川上まつ子フツチ(おばあさん)にアイヌ語で約四十三分間に渡って語っていただいた物語。主人公は幌尻岳の偉いカム



イ(神)の息子、ポロシルンカムイ。私はサモロモシリ(隣の国)で、夜も昼も栗だけ食べさせられて母神に育てられて暮らしていた。成長して父神の元へ帰る際、サラニブ(編袋)いっぱいクリを背負わされ、「ウップシのおじいさんの家の裏にクリを半分まきなさい。残りの半分は平取の神のおじいさんの村の東の方にまきなさい。そうすればクリ林が茂ってアイヌの国の人々も神々も食べるができるでしょう」と母神が……。ということでクリがアイヌの国に伝えられたというお話。

では、クリが運ばれてきた「サモロモシリ」って何処なんでしょうね？

主人公は「海の床の堅いところを歩いていくと陸に上がるところに切り立った険しい山があり、山伝いにいけばウップシという山に私の両親が……」と母神に道を教えられます。物語に出てくる地名を追うと、ウップシ(風不死岳)、ピラウトウル(平取)、シリムカ(沙流川)を経てポロシリ(幌尻岳)へ。とすると、サモロモシリは三内丸山遺跡もある東北地方と考えることもできませんか？

何れにしても北海道のクリの分布にびったり一致する象徴的なお話ですよ。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族博物館専務理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■安田千夏(やすだちか):神戸市生まれ。元アイヌ民族博物館学芸員。現在は同館でアイヌ若手育成事業の自然講座講師を務める。